

# 老年看護学におけるコミュニケーション演習の効果 —シミュレーションゲーム導入による学生の学び—

The Effects of Communication Exercises in the Study of Gerontological Nursing  
—Student Learning Through the Introduction of Simulation Games—

高橋 順子\*<sup>1</sup> 山本 道代\*<sup>2</sup> 眞鍋 知子\*<sup>3</sup>

Yoriko Takahashi, Michiyo Yamamoto, Tomoko Manabe

キーワード：老年看護，看護学生，コミュニケーション演習，シミュレーションゲーム

Key words : gerontological nursing, student nurse, communication exercises, simulation games.

## 要旨

【目的】本稿ではコミュニケーション障害を持つ高齢者への基本的態度の育成を目指した教材を活用し、その学びの明確化を目的とした。教材は、シミュレーションゲームを導入し、グループワークの活性化による思考の深化と、情報や状況を深く洞察する能力の育成を意図した。【方法】演習終了後に自記式質問紙調査をし、質的研究方法によって分析した。【結果】自由記載分析によって【グループワークの学び】、【コミュニケーション理解の深化】、【本演習による学び】の категорияが抽出された。特に、【グループワークの学び】、【本演習による学び】の両者の合計は、総記載数の半数以上を認め、学生のグループワークによる学びの深まりを示した。また、【コミュニケーション理解の深化】では、情報や状況を深く洞察する必要性への気づきを得たことが示された。【結論】本演習によって思考の深化とコミュニケーションに関する一定の気づきを得た事が示唆された。

---

\*1札幌保健医療大学 Sapporo University of Health Sciences

\*2北海道科学大学保健医療学部看護学科 Hokkaido University of Science Dept. of Nursing Faculty of Health Sciences

\*3了徳寺大学健康科学部看護学科 Ryotokuji University, The Faculty of Health Sciences

## I. 諸言

少子高齢化、核家族化の急速な進行に伴い、若年者と高齢者との関わりの減少が指摘されている。中でもコミュニケーションは、老年看護学実習において学生が最も困った援助項目であることが示されている<sup>1)</sup>。またこうした状況は、看護学生の高齢者とのコミュニケーションにおける困難に関連した教育上の課題<sup>2)3)4)5)6)</sup>として取り上げられ、様々な工夫がなされている。老年看護学におけるコミュニケーション教育の現状は、模擬患者を利用したもの、教員のロールプレイ<sup>7)8)</sup>、学生同士のロールプレイ<sup>9)</sup>などの演習の報告があった。しかし、教員および学生同士のロールプレイは、日々慣れ親しんでいる関係でのコミュニケーション演習であり、リアリティに欠け、臨場感のある学びとはならなかったことが指摘<sup>10)</sup>されてきた。また近年は、実際に地域の高齢者等に模擬患者の協力を依頼した研究が多く<sup>11)12)13)14)</sup>見受けられ、コミュニケーションの在り方を見つめなおすきっかけ<sup>15)</sup>となったことや、学生の実習への準備性、思考の深まりにつながった事<sup>16)</sup>が示されている。この模擬患者を活用した演習の中には、一定の患者を再現できる訓練を積んだ模擬患者の報告<sup>17)</sup>もある。しかし現実には、地域の比較的健康的な高齢者に依頼している状況が多く<sup>18)19)20)</sup>設定事例の再現性、広く活用可能な一般化の観点から限界がある。また、実際に実習で遭遇する多くの障害を抱えた高齢者、例えば難聴、視覚障害、認知症や失語症といった状況にある高齢者とのコミュニケーションはとりわけ個別性が求められ、難易度も高い。こうした背景から、学生が実習で高齢者の現実の姿に適合するコミュニケーションスキルを獲得するための教育方法の工夫が迫られている<sup>21)</sup>。

一方で、コミュニケーションスキルを獲得する上での課題もある。そもそもコミュニケーションスキルは極めて難しく、なかなか身

につかないもの<sup>22)</sup>である。さらに文字、言語共に迅速なやり取りを常態とする学生は、反応が遅延しがちとなる障害を持った高齢者とのコミュニケーションが困難であると考えられる<sup>23)</sup>。また、コミュニケーションとは単に知識や技術、情報収集の手段ではなく、他者を全体として理解する能力であり、信頼関係構築の基盤となる態度である<sup>24)</sup>。筆者らはかねてから、学生が、実習において高齢者のわずかな表現や言語的表出を見逃したり、気にとめない傾向を感じていた。したがって、学生はコミュニケーションスキルを活用する以前にコミュニケーション障害を有する高齢者との会話において基本的な能力を身につけている必要があると考えた。基本的な能力とは、丸山が指摘する自分の思いや考えを伝達しにくい失語症者の思いを汲み取る看護<sup>25)</sup>であり、換言すれば、対象の状況や思いを深く洞察する能力である。そして教育においてはその能力を涵養していく事が重要である。これらの背景から、相手の気持ちを感じ取る技能を教える方法論の開発<sup>26)</sup>が待たれている。

以上のことから本論では、老年看護学においてコミュニケーションスキルの基本的能力の必要性を学生が気づき、理解を深めることを目指した。そのための方法論として、眞鍋らの考案した、カード選択によりコミュニケーション場面を作成するシミュレーションゲーム<sup>27)</sup>を導入した教材を作成した。そしてその教材の活用によって、学習者が主体的に演習に参加できることと、患者の状況や背景を深く洞察できる事を意図した。

よって本研究の目的は、看護学生が、シミュレーションゲームを導入したコミュニケーション演習（以下、「コミュニケーション演習」とする）によって得た学びを明確化する事である。

## II. 用語の操作的定義

コミュニケーションは、受け手と送り手の間に言語的・非言語的手段を介在させ、双方の意思を伝達することによって成立<sup>28)</sup>する手段である。本研究では、高齢者特有のコミュニケーションスキルの低下がある<sup>29)</sup>対象とのコミュニケーションと定義する。さらに、コミュニケーションスキルをコミュニケーションの技術と能力を合わせたもの<sup>30)</sup>とし、両者を階層性ではなく並列の関係性にとらえることとする。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、既存の理論や概念では説明が十分ではない現象を明らかにすることを目指したことから、因子探索的研究に準ずるデザインとした。

### 2. 研究対象と期間

2011年4月に3年課程看護専門学校2年次に在籍する学生80名(40名×2クラス)を対象とし、研究期間は2011年4月であった。

### 3. コミュニケーション演習の展開

#### 1) コミュニケーション演習の位置づけ

- (1) 対象者は、1年次に看護学概論30時間、1単位を履修し、2年次には老年看護方法論Ⅰ(30時間、1単位)、老年看護方法論Ⅱ(15時間、1単位)を履修予定であった。本コミュニケーション演習は、2年次4月から実施予定の老年看護方法論Ⅰの1コマ(90分)で計画した。
- (2) 老年看護方法論Ⅰにおいて、高齢者とのコミュニケーション課題における講義1コマ終了後、1コマを使用し、コミュニケーション演習(2011年4月)を実施した。なおグループワークには全ての学生が参加し、話し合いが活性化するよ

う人数を1グループ5～6名とし、1クラス7グループ編成とした。

#### 2) 教材作成の意図

以下の二点を意図し、学習者の深い理解や納得が促進される教材の作成を目指した。

- (1) 学生が興味を持って主体的、積極的にグループワークに参加することで、ディスカッションが活性化し、思考の深化がはかれる。
- (2) コミュニケーションスキルは教え込まれ、マニュアル化されることによって身に付くものではない。したがって本教材によって、学生の主体的発見や気づきが得られる。

#### 3) 作成した教材の内容

- (1) 「シミュレーションゲーム」とは、発言カードの選択を繰り返すことによって、二者間(患者と看護師)の会話を創作していくものである。演習の開始は、最初に事例の高齢患者の発言「リハビリ…行かない…」に対する看護師発言カードの選択から始まる。3種類の看護師発言からグループで協議し、一つを選択する。選んだカードに書かれた記号の封筒を開封すると、その中にはその看護師発言カードに対応した患者発言あるいは反応の書かれたカードが入っている。また同じ封筒の中には、再び2種類の看護師発言カードが入っており、そのどちらかをグループで決定する。そして決定したカードに記載された番号の封筒を開封していく。すなわち看護師発言の選択によって、患者発言が変化し、結末が異なる(図1、2)。このように患者発言に対する看護師発言の選択を繰り返し、最終的にたどり着いた患者発言への返答をグループで考え発表した。
- (2) 看護師発言、患者発言ともに中身の見えない封筒に封をして入れられ、一度開封したものは、戻してやり直せない規則とした。本コミュニケーション演習で

は、構音障害のある高齢男性患者と看護師の会話場面を設定した(表1)。また、発言カードの入れられた封筒を43種類、グループ毎に準備した。患者の状況は脳梗塞後遺症による構音障害を呈して間もない男性高齢患者とし、二人暮らしをしていた妻は心労のため、同じ病院の異なる病棟に入院中であった。患者はまじめな性格で、リハビリにも熱心に取り組み1週間が経過していた。場面の設定状況は、リハビリに意欲的だった患者が、体調に異常は見られないものの、活気がなくリハビリに行かないと意思表示した場面とした。したがって、患者が妻を心配している状況を推し量り、発せられたわずかな言葉と、動作、姿勢などの文字情報を手掛かりに、看護師の発言を選定すれば、患者が最も言いたかった結論に到達する設定とした。

#### 4) 演習の目標

##### (1) 演習の目的

グループワーク演習を通し、コミュニケーション障害を持つ高齢者との関わりを主体的に学習することによって、必要な知識・技術を理解することができる。

##### (2) 演習目標

- ① コミュニケーション障害を持つ高齢者の状況を理解する。
- ② グループワークを通し、座学での知識を実践的に考えることができる。
- ③ グループワークを通し、コミュニケーション障害を持つ高齢者の援助方法を考察する。
- ④ グループワークでの結論を紙面にし、発表することができる。
- ⑤ グループワークに主体的に参加することによって、相互の学びを深めることができる。
- ⑥ 各グループの発表を通し、学びを共有し、発展させることができる。

#### 5) 演習の運営方法

以下の演習方法を提示、説明する事により、グループワークに入るまでの流れがスムーズとなり、グループワークとディスカッションが活発、かつ円滑に進められるようにした。

- (1) グループ形成後、事例を熟読する。
- (2) 最初のA～Cの看護師の対応を選択し、そのカード番号が記載された封筒を選ぶ。
- (3) カード番号選択と封筒の開封を繰り返し、対象者の反応のみ記載されたカード1枚にたどり着いたら、その言葉や状況に対する看護師の反応や言葉をグループで検討する。
- (4) 模造紙に発言カードを貼り、選択理由を付記して発表資料として準備する。
- (5) 注意事項は、封筒を透かして見ない、封筒を一度開けたら、他を選択せずそのまま続ける事である。
- (6) 演習の進め方が不明な時は、すみやかに教員に確認し、円滑に進める。

#### 4. データ収集方法

コミュニケーション演習の終了後、自記式質問紙を配布し、調査した。質問調査用紙は、シミュレーションゲームを活用した松本ら<sup>31)</sup>の作成した14項目5段階評定尺度に、「高齢者とのコミュニケーションの在り方について深く考えることができた」の項目と、当該演習に関する学びや感想の自由記載を加えた質問調査用紙を作成した。質問調査用紙への記入は、コミュニケーション演習終了後に実施した。5段階評価での問いは、非常にあてはまるを5、全くあてはまらないを1として設定した。

#### 5. 分析方法

コミュニケーション演習のデータは、項目ごとの平均値および標準偏差を算出した。また、コミュニケーション演習後における自由

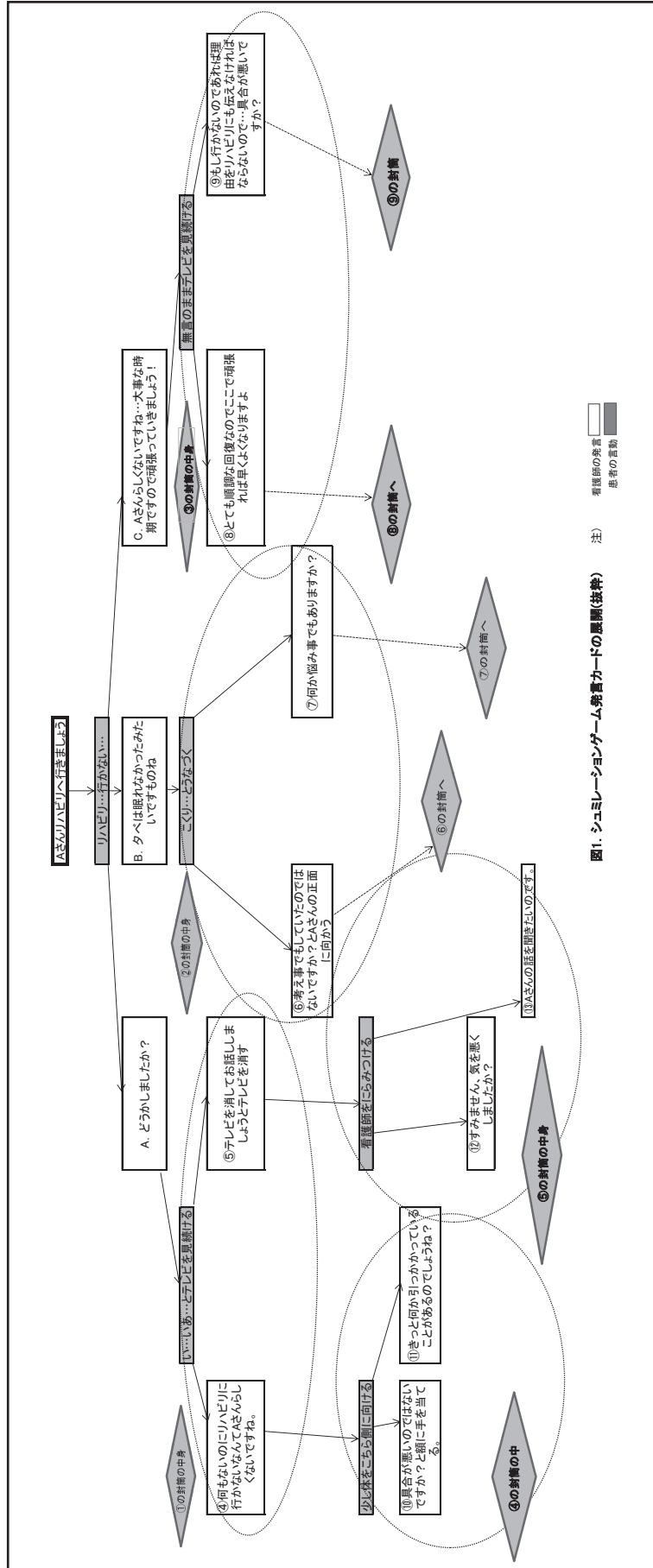


図1. シミュレーションゲーム発言カードの展開(抜粋)

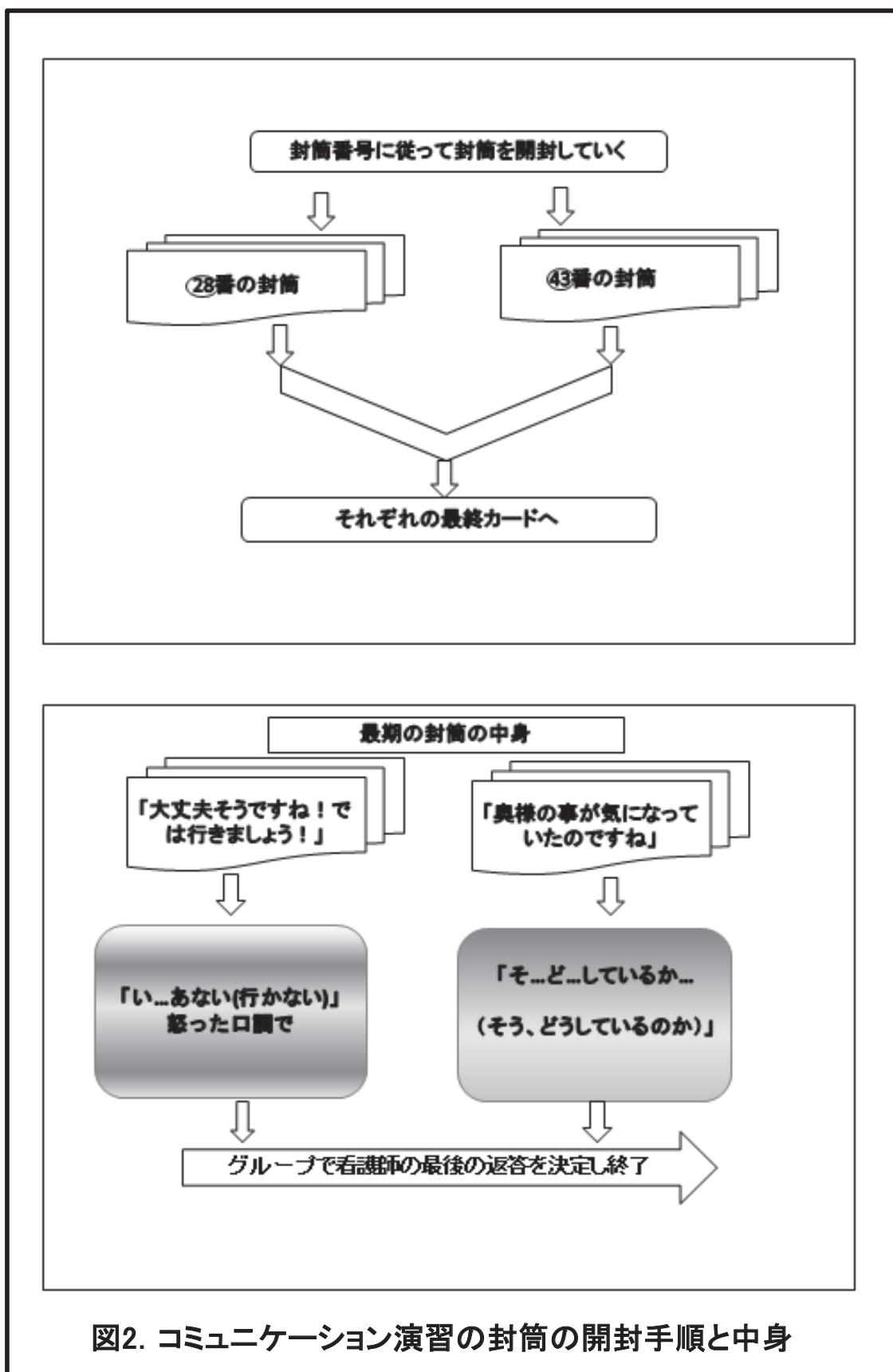


図2. コミュニケーション演習の封筒の開封手順と中身

**表1. 事例・場面紹介と提示した課題**

**【事例紹介】**

Aさん、73歳男性。左中大脳動脈領域梗塞、右半身麻痺、構音障害あり。言語機能は比較的保たれているが、発話量が少ない。2011年3月26日に庭で倒れ、救急車で近医へ搬送。保存的療法(点滴治療)実施され、3月30日からリハビリテーションが開始となる。リハビリでは、車椅子からの立ち上がり、立位の保持、言語訓練が実施されている。

妻(70歳女性)と2人暮らしであったが、妻は夫が倒れた2日後に心労からか、めまいを訴え受診。現在同じ病院で高血圧治療のため入院中。病棟が異なるため、3月30日のリハビリ時に一度見舞ったきりである。妻はおとなしい性格で、専業主婦として夫を支え続けていた。自分も入院することになり、精神的な落ち込みが見られ、Aさんが訪問した時、涙を流していた。

Aさんは入院前、妻との山歩きが趣味で山菜とりに出かけるのが楽しみだった。銀行に定年まで勤め、趣味らしいものはなかったが、庭にある花の世話を好んでしていた。妻の話では、とても慎重な性格で、もともと口数が少ない方だが、言葉が出にくくなってなおさら表情が暗くなったという。しかし、妻に対してはいつも優しく何かと手助けをしてくれた夫であった。右利きであった。

現在は車椅子の操作を何とか左手で実施しているものの、不確実であり、病棟の廊下でしばしば立ち往生していることがある。車椅子への移動はまだ1人で実施したことはない。排泄は、全介助にて日中のみ病室トイレにて実施。食事は嚥下障害が見られないため、塩分8グラム以下のカロリー1800kcalである。入院当初はペースト食で全介助されていたが、現在は食べにくいものを介助され、左手でフォークやスプーンを使用し自力摂取している。排泄も床上であったが、本人の強い希望もあり、日中の排尿と大便時にはトイレへ車椅子で行き実施するようになった。4月6日看護師がリハビリの時間が近づいたため、車椅子への移動を実施しに訪れた場面である。

**【場面紹介】**

Aさんは、朝食後、ベッド上で臥床し、ぼんやりとテレビを見ている。昨夜見回りのたびに、起きていた様子と申し送りがあった。朝のバイタルサインは特に変化は見られていなかった。

朝食は、いつもの2分の1程度の量であった。Aさんは、ベッドに臥床したまま、看護師と目を合わせようとしない。

看護師「Aさん、そろそろリハビリの時間になりました。車椅子へ移動してリハビリに行きましょう」

Aさん「リハ…イリ、いきない(リハビリ行かない)」

**【課題】**

この場面の看護師のことばを以下の3つから一つ選び、その理由をグループで考えて下さい。

- A. どうかしましたか？
- B. 昨夜は眠れなかったみたいですね。
- C. Aさんらしくないですね、でも大事な時期なので頑張ってください。

記載への回答をBerelson,B.<sup>32)</sup>の内容分析を参考にし、以下の手順で分析した。はじめに全体の意味内容を損なわないように注意しながら、1内容を1項目として含むセンテンスを記述単位として整理した。次に何度も記述単位を読み込みながら、類似する意味内容を持つ記述単位を集め、抽象度を高めた。いくつかの集合体となった記述単位をカテゴリーとし、それらの内容を表していると考えられるネーミングを付与した。記述単位を読み込み、カテゴリーとカテゴリーネームが一致するかどうかの確認を繰り返し、妥当性を高めた。これらの過程を二人の研究者間で一致するまで反復した。カテゴリーの信頼性を確保するため、質的研究の経験を持つ看護学研究者にカテゴリー分類を依頼し、一致率をScott.W.A<sup>33)</sup>に基づき算出、検討した。また信頼性を確保しているかどうか判断するため基準を70%以上<sup>34)</sup>とした。

6. 倫理的配慮

当時研究者は非常勤であった事、当該校に倫理委員会が存在しなかった事から、以下の手続きを踏んだ。

学校長に研究の意図と内容を口頭及び紙面で説明の後、内諾を得た。次にコミュニケーション演習および講義終了後、対象学生に研究目的、研究方法を口頭にて説明した。質問

調査用紙は、無記名であり個人が特定されない事、成績とは一切関係しない事、回収方法は、教員が退室後、学生によって回収され、質問調査用紙が未提出であってもその学生が特定されたり、学生に不利益が生じることは一切ない事、同意しない学生は提出の必要がない事等を説明した。また同意は質問調査用紙の提出と質問紙内の研究協力諾否の欄への意志の記載にて得た。

IV. 研究結果

1. コミュニケーション演習自体の評価について

71部を回収し、回収率は88.8%であった。質問調査用紙に記載した15項目に対する回答を、表2に示した。「グループワークの時間は十分であった」の設問に対する回答の平均値が3.83であった以外は、全ての項目で平均値4.00を超え、最も高い値は、「グループの他のメンバーの意見を良く聴く事が出来た」で4.70±0.54であった。次に「グループワークの方法がよくわかった」4.63±0.48、「教員の説明の速さは早すぎることも遅すぎることもなかった」4.63±0.56、「グループワークの流れが順序良く整理されていた」4.61±0.64、「今日のグループワークは楽しかった」4.61±0.60、「授業の内容がよくわ

表2. 演習終了後質問紙調査項目

設 問	n=71	
	平均値	標準偏差
1 授業の内容がよくわかった	4.57	0.56
2 グループワークの方法がよくわかった	4.63	0.48
3 グループワークの流れが順序良く整理されていた	4.61	0.64
4 グループワークはこれまで学んだ知識を活かすことができた	4.06	0.73
5 グループワークではグループの学生全員が参加できていた	4.58	0.65
6 グループの他のメンバーの意見を良く聴く事ができた	4.70	0.54
7 グループワークは現実の看護場面をイメージできる展開であった	4.34	0.73
8 教員の説明の速さは早すぎることも遅すぎることもなかった	4.63	0.56
9 教員の指導やアドバイスなどはちょうどよかった	4.28	0.70
10 必要な時にはいつでも教員に質問することができるようになっていた	4.32	0.75
11 自分の意見を十分に話し、グループワークに貢献できた	4.00	0.92
12 今日のグループワークは楽しかった	4.61	0.60
13 グループワークの時間は十分であった	3.83	1.03
14 グループワークの発表時間は十分であった	4.51	0.73
15 高齢者とのコミュニケーションの在り方について深く考えることができた	4.35	0.75



かった」 $4.57 \pm 0.56$ と続いた。また、「高齢者とのコミュニケーションのあり方について深く考える事ができた」は $4.35 \pm 0.75$ であった(表2)。

## 2. コミュニケーション演習による学び、感想の自由記載について

自由記載では、91の記述数が得られた。以下にカテゴリーを【 】とする。分析の結果、【グループワークの学び】、【コミュニケーション理解の深化】、【本演習による学び】の3つのカテゴリーが導出された(表3)。Scottの計算式によって一致率は84%であり、一定の水準が得られ、カテゴリーの妥当性が検証された。【グループワークの学び】(記述数39: 42.86%)では、「グループ内での異なる意見が聞けて良かった」、「グループでも考えが違う人がいて勉強になると思ったが、発表を聞いたらもっと考え方が違ったりしてもっと勉強になった」、「グループによって同じ選択肢でも理由が異なり楽しかった。またやりたい」、「他の人の意見を聞く事で色々な見方をすることができた」等の内容が見受けられた。【コミュニケーション理解の深化】(記述数28: 30.77%)では、「患者の

反応によって言葉も慎重に選ばなければいけないと感じた」、「一つの発言が傷つけてしまったり心を閉ざすことがあると感じた」、「自分の1つ1つの言動がどれほど患者さんに影響するのか考えさせられた」、「うなづきには色々な種類があることがわかった」、「言葉は1回きりのもので、どんな結果になろうと引き返せないと実感」などの内容があった。【本演習による学び】(記述数24: 26.37%)では、「封筒を開けていくのはゲーム性があり、はじめてでとても楽しく学習出来た」、「心理ゲームのようで楽しく取り組む事が出来た」、「コミュニケーション障害を持つ高齢者の看護に興味を持ちました」、「色々な対応があり答えはないと気付けた」などの内容があった。また、マイナスな意見として「時間と選択肢がもう少しあればもっと深く話し合いができたと思う」、「選択肢の中からしか答えを選ばず自分ならこうしたと思うところが多々あった」が見られた。

## V. 考察

コミュニケーション演習の第一義的な目的は、言語障害を持つ高齢者とのコミュニケー

表3. コミュニケーション演習による学び(自由記載分析)

カテゴリー		総記述数=91	
サブカテゴリー	数	記述内容(抜粋)	
グループワークの学び(39)	勉強になった	14	グループによって選択は一緒でも理由は違ったり、これは違うかなと思った選択がコミュニケーションに生かされていてとても参考になった グループでも考えが違う人がいて勉強になると思ったが、発表を聞いたらもっと考え方が違ったりしてもっと勉強になった
	楽しく、面白かった	14	いつもと違うグループワークでとても楽しくできた グループによって同じ選択しても理由が異なり楽しかった。またやりたい
	異なる意見交換ができた	11	グループ内での異なる意見が聞けて良かった 40人もいと様々な結末があるのだと言うことがわかった
コミュニケーション理解の深化(28)	難しさを感じた	13	一つの発言が傷つけてしまったり心を閉ざすことがあると感じた 言葉は1回きりのものでどんな結果になろうと引き返せないと実感
	対応策について考えた	7	患者の反応によって言葉も慎重に選ばなければならぬと感じた 看護師本位や決めつけるような言葉ではなく、患者さんを考えた声かけが大切なのだと思った
	新たに気付いた	5	うなづきには色々な種類があることが分かった 自分の一つ一つの言動がどれほど患者さんに影響するのか考えさせられた
本演習による学び(24)	習ったことを思い出した	3	今まで習ったことを少し思い出せた Aさんの気持ちになって考えることができた
	ゲーム性があり楽しかった	9	封筒を開けていくのはゲーム性があり、初めてでとても楽しく学習できた 心理ゲームのようで楽しく取り組むことができた
	有意義な学びだった	8	一つの事例を考えるだけで多くの考え方があったことが分かった。これからはもっと視野を広げて考えるようになりたい 様々な視点から見れて勉強になった
	意外性があり、興味を持った	5	コミュニケーション障害を持つ高齢者の看護に興味を持ちました 別のパターンを用いてもう一度行ってみたい授業だと思った
	検討すべきだと感じた	2	時間と選択肢がもう少しあればもっと深く話し合いができたと思う 選択肢の中からしか答えを選ばず自分ならこうしたと思うところが多々あった

シオンにおける学生の基本的な能力の育成である。その基本的な能力とは、コミュニケーションを交わす際に、患者の表情や態度、わずかな言葉などを注意深く観察し、相手の気持ちを察知していく力、すなわち状況や思いを深く洞察する能力である。そしてその能力は、一方的に教え込まれる事によって、育成されるものではない。そのため、コミュニケーション演習では、既存の知識をもとに学生達が主体的に思考し、導き出した結論とその意味づけによって学びが深まることを目指した。

したがって、本項においては、コミュニケーション演習によって得られたデータを元に以下の二つについて考察する。一つには、コミュニケーション演習の有用性を明らかにする事である。もう一つには、コミュニケーション演習そのものによって得られた学生の学びの実態を明確にする事である。

### 1. コミュニケーション演習の有用性について

質問紙の調査項目15のうち、「グループワークの時間は十分であった」 $3.83 \pm 1.03$ の結果を除き全てが、評定値4.00を超え、コミュニケーション演習の評価が総じて高かった事を示した。コミュニケーション演習は、事例の提示と演習の運営方法の説明によって開始し、必要時には教員がすぐ対応できる体制をとった。質問項目に対する回答結果は、これらが問題なく学生によって運営されたことの反映であると考えられ、グループワークが円滑に進められ、ディスカッションが活性化したことを示唆した。さらにこれらによって、コミュニケーション演習の目標でもあったグループワークによる学びの共有と深化が達成される一助となったことが考えられた。また、このグループワークの活性化や本演習に関する成果は、自由記載にも表れていた。例えば、【グループワークの学び】(記述数39: 42.86%)、【本演習による学び】(記述数24:

26.37%)の両者のカテゴリーを合わせると63記述数(69.23%)であった。このことは、学生がグループワークを含むコミュニケーション演習そのものの過程から、多くの学びを得た事を示していると考えられた。特に「グループのメンバーの意見を良く聴く事が出来た」は $4.70 \pm 0.54$ であり、最も高い数値であった。これは、5~6人のグループ編成であったため、グループメンバーの意見を十分に聞きやすい人数であったことが考えられた。ただし、グループワーク時間については次の2点から検討を要すると考えられた。一つは「グループワークの時間は十分であった」の設問に対する回答の平均値が3.83と全体との比較では最低値であった事、次にマイナスの意見として「時間と選択肢がもう少しあればもっと深く話し合いができたと思う」が見られた事である。

また他には【グループワークの学び】において、「グループでも考えが違う人がいて勉強になると思ったが、発表を聞いたらもっと考え方が違ったりしてもっと勉強になった」、「グループによって同じ選択肢でも理由が異なり楽しかった、またやりたい」等があった。これらは異なる意見を聞き、比較する事によって得られる学びへの率直な感想であると考えられる。また、グループワークによって、他者の意見や発想に刺激され、主体的に学習する意欲が高まる等の一定の効果<sup>35)</sup>を示した結果であると考えられた。本コミュニケーション演習にて作成した教材作成の意図の一つは、学生が興味を持って主体的に参加できることで得られる、グループワークの活性化と思考の深化であった。またコミュニケーション演習に関する高評価は、同じ事例であっても、選択した発言によって結末が異なっていくという意外性によるところが大きいと考えられた。さらに事例をよく読み込むことによって、短い言語表現に隠された意味が推測できることや、患者が最も言いたかった結論に早く到達可能となる事がわかる。上述

したコミュニケーション演習に対する好意的な反応からは、コミュニケーション演習がこのような教材の仕掛けや工夫によって、より学生の内発的動機づけに関与した可能性を指摘する事ができる。辰野は動機づけの具体的方法として興味に訴える事の効果に言及している<sup>36)</sup>。例えば愉快的感じを与えるものや、新奇なもので本人の注意や好奇心を引くものは学習意欲を引き出すと述べている。これらのことは、コミュニケーション演習で使用した教材との類似性と見る事ができる。さらに、「言葉は1回きりのもので、どんな結果になろうと引き返せないと実感」など、紙上事例であっても模擬患者を導入した演習に匹敵する臨場感が記された。このやり直しが不可能であるシミュレーションゲームの一回性が、グループワークへの真摯な取り組みに影響し、活発なディスカッションに関与したと考えられた。

## 2. コミュニケーション演習による学生の学びについて

コミュニケーション演習に活用したシミュレーションゲームのカードは、複数の看護師発言から1つを選択する事の繰り返しである。その一つを選択するために、対象事例の背景や心理的、身体的状況、少ない言語的表現、その他の文字情報を総動員し、自らの発言を思考する必要がある。したがって情報や状況を深く洞察する必要性への気づきを促進する事が考えられた。

例えば【コミュニケーションの効果】では、言葉以外が指し示す情報の重要性や、背景を推し量る事の意味を見出す可能性が示されていた。具体的には「患者の反応によって言葉も慎重に選ばなければならないと感じた」、「一つの発言が傷つけてしまったり、心を閉ざすことがあると感じた」、「自分の一つ一つの言動がどれほど患者さんに影響するのかわかえさせられた」等の内容が見られた。作成した教材は、事例の熟読によって、主体的発見

や気づきにつながるよう意図していた。したがって、これらの学びの効果は、コミュニケーション演習に用いた事例教材の適切性に起因すると考えることができる。すなわち教材の事例を良く読み込み、患者の背景や、発するわずかな表現から、状況を推し量ることによって学生は、看護師に求められる発言や言動の在り方に示唆を得ていた。そして同時に自分たちの言語選択によっては予想外の結末となる設定によって、自分たちの先入観や思考の傾向に気づきを得ていた。さらに、「言葉は1回きりのもので、どんな結果になろうと引き返せないと実感」からは、自分たちがカードを選択して導き出した結論を重く受け止めた状況が理解できた。また、自分なりに結果を意味づけ、コミュニケーションに関わる深い理解をした様子が伺われた。

【グループワークの学び】、【本演習の学び】から得られた「他の人の意見を聞く事で色々な見方をすることができた」、「色々な対応があり答えはないと気付けた」等の記述からは、次のようなことが考えられた。コミュニケーション演習による能動的な演習への取り組みが、グループワークの促進とともに言葉の持つ一回性、言葉以外の情報の重要性に気付く契機となった事。そしてコミュニケーションが内包する多様性、多義性を考える糸口になった事である。

水寄はコミュニケーションに関わる教育について、次のような状況を危惧している。コミュニケーションに関する基礎知識をそのまま伝えても、学生はコミュニケーションの本質を自分に引き寄せて理解する事は出来ず、理解が伴わないコミュニケーション技術の習得が実践の場で役立つ事はない<sup>37)</sup>。しかしながら、コミュニケーション演習によって得られた上述した学生の学びは、このような懸念を翻すものであったと考える事ができる。つまり、内発的動機づけによって支えられた能動的な演習への取り組み、意欲の向上は、グループワークの活性化による思考の深化を促

進した。そしてその思考の深まりが、コミュニケーションに関わる実感に伴う理解や気付きにつながったと指摘できる。これらの気付きは、その後の体験の蓄積によって、自分らしい考え方の形成と、教育にとって重要課題である思索と涵養<sup>38)</sup>をもたらすことにつながると期待できる。したがって、コミュニケーション演習によって得られた深い実感や理解は、コミュニケーションの基本的能力の学びとなり、さらにはコミュニケーションに関わる思考の蓄積と、姿勢の形成に關与する可能性が示唆される。

加えて、本演習の内容は紙上事例のため再現可能であり、選択肢の精選、教材作成の簡易化の検討によっては、一般化することも可能である。ただし改善すべき点として、看護師発言の内容のバリエーションの不足、グループワークにかけられる時間の制約がある事であり、今後検討を要すると考えられた。

## VI. 結論

コミュニケーション演習によって得られた学びの検討により、以下の結論を得た。

1. コミュニケーション演習は、学生の主体的なグループワークを通して発言の活性化と思考を深化させる可能性がある。
2. 学生は、コミュニケーション演習によって、コミュニケーションの持つ多様性に気付き、対象や状況に合わせた態度、言葉の活用等、コミュニケーションに関する基本的能力の学びを得ることができる。

## VII. 今後の課題

本研究の課題として明らかになったことの一つに、看護師発言の選択肢の少なさがあげられる。また、対象校が1校であるという限界がある。そのため、今後教材の精選及び対象校を増加し、教材の一般化を目指していきたい。

## 引用文献

- 1) 服部紀子,青木律子,安藤邑恵.老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析ー「飲食」への援助に焦点をあててー.日本看護学会論文集 看護教育.2005,36,p.105-107.
- 2) 塚本都子.認知症高齢者模擬患者の参加型演習における教育効果ーコミュニケーションに焦点をあてた分析から.日本看護学会論文集 老年看護.2010,40,p.147-149.
- 3) 新山真奈美.看護学生における高齢者とのコミュニケーションスキルを高める体験学習の効果.日本看護学会論文集 老年看護.2008,38,p.285-287.
- 4) 澤田幸子,石井美紀子.老年看護学における高齢者とのコミュニケーション演習 看護師役学生の学びの分析.日本保健科学会誌.2012,15,2,p.63-70.
- 5) 温水理佐,箕浦とき子,松波美紀.認知症高齢者と看護学生とのコミュニケーションの実態とその指導の検討.岐阜看護研究会誌.2011,3,p.105-110.
- 6) 梶本朋子,須田厚子,田邊美津子.老年看護学実習での高齢者とのコミュニケーションにおける教育課題.川崎医療短期大学紀要.2007,27,p.19-24.
- 7) 森鍵祐子,齋藤美華,河原礼子.老年看護における教員が対象者役を演じるロールプレイング演習の意義の検討.北日本看護学会誌.2007,9,2,p.46-52.
- 8) 齋藤美華,森鍵祐子,河原礼子.家族看護教育にロールプレイングを取り入れた成果 高齢者夫婦と未婚の子への訪問看護場面を通して.家族看護.2007.5,2,p.118-127.
- 9) 前掲3).
- 10) 前掲4).
- 11) 前掲2).
- 12) 古村美津代,木室知子,中島洋子.老年看護学教育における模擬患者導入の臨地実習

- への影響.老年看護学.2009,13,2,p.80-86.
- 13) 中山亜弓,杉本幸枝,土井英子.模擬患者(SP)を活用したコミュニケーション演習の学びの分析ー基礎看護学実習後の振り返りを通してー.看護・保健科学研究誌.2008,8,1,p.141-147.
- 14) 清水裕子,野尻雅美.模擬患者を活用した学生用老年者コミュニケーション教育プログラムの特性.ヒューマンケア, 2005, 6,p45-54.
- 15) 前掲4).
- 16) 前掲12).
- 17) 前掲14).
- 18) 前掲2).
- 19) 前掲12).
- 20) 前掲4).
- 21) 前掲14).
- 22) Marion Nesbit Blondis,Barbara E.Jackson.患者との非言語的コミュニケーション 人間的ふれあいを求めて.仁木久恵,岩本幸弓訳.医学書院,2000,p.19.Nonverbal Communication with Patients : Back to the Human Touch.
- 23) 高橋順子,眞鍋知子.老年看護コミュニケーション演習の効果ーシミュレーションゲームの導入による学生の学びー.日本老年看護学会 第17回学術集会.2012,p.96.
- 24) 水嶋知子.コミュニケーション能力と倫理.看護教育.2008,49,2,p.112-117.
- 25) 丸山智子,庄村正子.脳血管疾患による失語症患者の思いを汲み取るかわり.リハビリナース.2010,3,2,p.102-108.
- 26) 前掲22).
- 27) 眞鍋知子,阿部妙子,松本千恵子他.訪問看護における面接技法を理解させる授業の構築ー会話のシミュレーションゲーム「面接技法」の実施ー.ラポール.2003,16, p.2-3.
- 28) 鎌田ケイ子,川原礼子,矢部弘子他.新体系看護学全書 老年看護学②健康障害を持つ高齢者の看護.2012,p.24.
- 29) 真田弘美,正木治恵編.看護学テキスト NICE 老年看護学技術 最後までその人らしく生きることを支援する.2013,p.107.
- 30) 大坊郁夫編.幸福を目指す対人社会心理学 対人コミュニケーションと対人関係の科学.ナカニシヤ出版.2012,p.193-210.
- 31) 松本千恵子,阿部妙子,櫻井靖子他.「訪問看護における面接技法を理解させる授業の構築ー介護者との会話シミュレーションゲームの実施ー」,第33回日本看護学会抄録集ー看護教育ー,2012,p.108.
- 32) Berelson,B.内容分析.稲葉三千男訳.みすず書房,1957,p.1-77.
- 33) 舟島なをみ.看護教育学研究 発見・創造・証明の過程 第2版.2010,p.245-247.
- 34) 前掲33).
- 35) 大平光子,井端美奈子,町浦美智子.主体的学習態度をはぐくむ教育方法ー助産学演習における少人数グループワークの試み.大阪府立看護大学紀要.2005,11,1,p.23-29.
- 36) 辰野千寿.学習心理学.1994,教育出版株式会社.p197.
- 37) 水嶋知子.コミュニケーション能力と倫理.看護教育.2008,49,2,p.112-117.
- 38) 前掲37).